

考力」育成につながるものかどうかの吟味も欠かすことはできない。これらは、教科指導（学習）の際の捉えと同一である。

（２）目的意識をもったアクティビティの設定

（１）で述べた「学習問題の設定」とも関連させながら、「何とかして友達の言うことを理解したい」「何とかして自分の思いを伝えたい」という状況をアクティビティの中に組み込む。そのようなアクティビティを通して、子どもたちはコミュニケーションを図ることの大切さを体得していこう。

そこで私たちは、英語活動における「思考力」育成のために、どのようなアクティビティが適切なのかを考えてみた。そして実践を通しながら、目的意識をもったアクティビティを設定するとコミュニケーション活動が促されることを見出した。さらに細かく実践を分析していくと「話題意識」「相手意識」「場意識」の３つが、アクティビティの目的意識に働いていた。「話題意識」とは、何について伝え合うのかということ、「相手意識」とは、だれと伝え合うのかということ、「場意識」とは、どのような状況で伝え合うのかということである。これらの視点から目的意識をもったアクティビティを考えていくことで、実の場に近いコミュニケーション場面が設定される。それが「相手のことを分かりたい」「自分のことを伝えたい」という思いを誘発し、「思考力」を働かせることにつながっていくのではないかと考えた。

3 実践事例とその成果

（１）学習問題の設定

○ 第6学年「できることって何？」実践

自分の得意なことについて、友達と尋ね合うアクティビティを設定した。

その導入においてHRTとJTEの会話場面を子どもたちに示した。ここでは、JTEの“What can you do?”という質問に対し、HRTが“I can ～.”と答えるのだが、意図的に「～」の部分で不明瞭に発音した。JTEが何度か聞き返してもコミュニケーションが成立しない様子を見た子どもたちは、「伝えやすい方法を考えよう」という学習問題をもったのである。

子どもたちは、この問題を解決するために、「～」部分を強調したり、伝えた内容に合うジェスチャーを工夫したりしながら、コミュニケーションを図ろうとした。すなわち、学習問題の設定により、「思考力」が働く学習への方向付けがなされたのである。

さらに、この授業を通し、強調すべき言葉やジェスチャーの果たす役割に気付いた子どもたちは、他の話型においてもこの「思考力」を働かせようとした。このことは、自分の思いを伝えるために重要な言葉は何かを考えることでもある。会話において、すべての言葉が聞き取れなくともコミュニケーションを成立させるために、このような「思



【HRTとJTEによる会話場面の提示】

考力」が働く学習問題を設定することの意義を確認できた。

(2) 目的意識をもったアクティビティの設定

① 話題意識をもたせて ～第2学年「1週間の予定は？」実践～

曜日の言い表し方に興味をもたせて、1週間の予定を互いに尋ね合うアクティビティを設定した。その導入において、子どもたちに話題を捉えさせる際、HRTとJTEのデモンストレーションを見せ、何について話し合うのか推測させるようにした。



まず、HRTが“When are you free?”とJTEに問いかけた。【教師の会話から話題を推測】JTEはカレンダーをさしながら、“I go to swimming on Tuesday. I play tennis on Wednesday. I play～. So I’m free on Monday.”と、ジェスチャーを加えて答えた。そうすることで子どもたちは、話題である“free”の意味を推測した。「空いている日のことかな。」「遊べる日のことかな。」と“free”の意味を自分なりの言葉で表そうとしたのである。

② 相手意識をもたせて ～第4学年「友達のことを知ろう」実践～

“What sports do you like?” “I like ～.”と友達同士インタビューをし合うアクティビティを設定した。その際、単なる反復練習にならぬよう、インタビューカードを各自に持たせ、会話により発見した「友達の好きなスポーツ」をそこにまとめるようにした。「○○さんは、何が好きかな。」と相手意識をもたせるためである。

自分の好きなスポーツを英語に直すことが難しい子どももいたが、“What’s ‘Kendo’ in English?”とJTEに尋ねたり、ジェスチャーを工夫したり、あるいは黒板に掲示している絵カードを指差したりしながら友達に好きなスポーツを伝えることができた。



活動の振り返りの場面では、友達の意外な側面を知り「○○さんが～を好きだと聞いてびっくりした。」と、話型の習得だけではなく、内容面に目を向けた感想が多く見られた。

【インタビューカードを持って交流】

③ 場意識をもたせて ～第3学年「ようこそ『My dream house』へ」実践～

“Can I have some water?” “It’s over there.”の話型を用いて、尋ねられた場所を相手に伝えるアクティビティを設定した。飲料水のある場所によって、どのような対応をすればよいか、その伝え方を工夫させることができるよう体育館で活動を行った。広い場所で活動することで子どもたちは、その場所が遠くにあるときには遠くを指差し、また、近くにあるときは近くをさしながら相手に伝えようとした。



さらに、“bathroom” “kitchen”など、複数の部屋を体育館の中に設定しておくことで、子どもたちはその場所を随時判断しながら、状況に応じたジェスチャーの工夫をしていった。

【“It’s over there.”】

ここで示した3つの実践を振り返ってみると、どれも視覚情報が効果的に働いていることが見えてくる。

例えば、第2学年「1週間の予定は？」実践では、教師が会話例を提示する際に、カレンダーをおさえながら話すことで曜日の意識をもたせ、会話の内容を捉えられるようにした。また、第3学年「ようこそ『My dream house』へ」実践及び第4学年「友達のことを知ろう」実践では、学習の場に絵カードを掲示しておくことで、場意識や相手意識をもったコミュニケーションの一助となった。自分の思いを英語を用いて表現することに慣れていない子どもたちにとって、絵や図などをコミュニケーションの補助として用いることの有効性がうかがえた。

4 今後の方向性

(1) 「思考力」育成とアクティビティとの関連性の追究

英語活動における「思考力」は本年度措定したところである。さらにコミュニケーション活動の質を高めるものとなるよう、今後、実践を重ねながら吟味していく必要がある。その上で、次年度の方向性として次の2点を考えている。

1点目は、「言語と文化に関する事項」における「思考力」とアクティビティとの関連性の追究である。

本年度は、指導要領解説に示された外国語活動の内容のうち、「コミュニケーションに関する事項」に研究の重点を置いた。次年度は、もう1つの内容である「言語と文化に関する事項」にも研究の視点を当てる。そこでも、コミュニケーション活動を通して言語や文化について体験的に理解することが求められている。そのため、本年度措定した「思考力」を働かせながら、そのねらいに迫るアクティビティを追究していきたい。同時に、「言語と文化に関する事項」の内容において求められる「思考力」を探ることも視野に入れながら研究を進めていこうと考えている。

2点目は、「思考力」と「アクティビティ」、「英語の歌やチャンツ」の有機的な関連を図ることである。

英語の歌やチャンツにより、十分に英語に慣れ親しませておくことで、子どもたちは、自分の思いを自信をもって表出しようとしたり、会話を推測する手がかりにしようとしたりする。そこで、授業の中に英語の歌やチャンツを効果的に取り入れながら、「思考力」育成を図るアクティビティを設定し、コミュニケーション活動を促していきたい。

(2) 評価の在り方

英語活動は、活動を主体として学習が進んでいくため、1時間に全ての子どもを見取ることは難しい。おそらく単元単位での評価が妥当であろう。単元ごとに、そこでねらう「思考力」が育っているかどうかを見取るのである。ここでは、子どもの自己評価と教師の見取りとを合わせながら評価する。そのため、子どもの自己評価シートの開発を試みながら評価方法を確立していきたい。